

Michel Schneider : *Maman*

Gallimard, coll. « L'Un et l'autre », 1999

吉 田 城

マルセル・ブルーストの研究書はいったい毎年世界でどのくらい出版されているのだろう。正確な数字は分からないが、フランスだけでも数十冊は数えることができるから、他の文学者と比較しても相当な数にのぼることに間違いない。ブルースト文学の受容にはいくつかの転機があった。『失われた時を求めて』ブレイヤッド旧版が3巻本で編纂され、またそれまで一般に知られていなかった未完の小説『ジャン・サントゥイユ』が刊行された前後のブルースト・ブームは1950年代のことであった。その後作家の生誕100年を記念して1971年には、さまざまな催しがおこなわれ、しばらく前にパリ国立図書館に寄贈された膨大な草稿など原稿類への関心と、おりから興隆していた「ヌーヴェル・クリティック」の勢いが追い風となって、70年代には飛躍的に作品研究が進んだ。第三の波は『失われた時を求めて』全体が著作権解消の時期を迎えた1987年にやってきた。ガリマール社によるブレイヤッド新版（4巻本）を筆頭に、ガルニエ＝フラマリオン版、ラフォン版、少し遅れてリーヴル・ド・ポッシュ版などが相次いで登場したのである。とりわけブレイヤッド版には、急速に進んだ草稿研究の成果が反映され、以後の研究に大きな素材を提供することになった。

これらの版本の刊行とともに、新しい研究の流れが勢いをました。なかでも、草稿資料に基づきたいわゆる生成研究と、そして90年代以降の顕著なブルーストの人間研究である。60年代からしばらく続いた作品（あるいは「テキスト」）研究の伝統が捨て去られたわけではないが、伝記があいついで執筆され（ディースバック、デュシェーヌ、タディエ）、小説を単に閉じられた世界としてではなく、作家の人間像や同時代の文化と密接に結びついた多面的な作品として読み直す作業がしだいに研究の中枢をなすようになってきたのである。ブルーストと父親、ブルーストの交遊、セクシュアリテ、書簡分析、などなど。

ミシェル・シュネデールの『ママン』はこのようなブルースト研究の全体的趨勢のなかで、現在見られるもっとも先鋭的な読解の一つであると言えよう。シュネデールは1944年生まれ、フランスの高級官僚養成校である ENA を卒業した変わり種の作家である。精神分析家であり、エコノミストであるシュネデールは、また音楽にも造詣が深く、みずからピアノも弾くという。この方面では『落日——シューマン』（1989）『グレン・グールド、ピアノ・ソロ』（1995）などの著作がある。

『ママン』は不思議な本である。プルーストとその母親（ママン）すなわちジャンヌ・プルースト夫人の関係を基軸にして、小説の世界を読み解いていくスリリングな冒険のエッセーである。『失われた時を求めて』ばかりではなく、『ジャン・サントウイユ』やとくに『サント＝ブーヴに反論する』から数多くの引用をおこなっているが、それらには一切参照ページが明記されていない（その割には、引用の文章はとても正確だ）。そればかりか、注が皆無であり、またほとんど先行研究に言及していないところを見ると、いわゆる専門書として書かれたものとはとうてい言えない。

それでもなお、対象に肉薄する作者の熱意に満ちた分析は平凡な研究書の水準をはるかに超えて、つい見落としがちな、なにげない表現や挿話の背後に、深く隠された秘密の水域を探り当てようとする。この本全体を貫通する主題は、いかにしてプルーストが「母親の愛を断ちきり、作家になる」という究極の選択をおこなったか、というほとんど存在論的な重みをもった一つの運命を描き出すことにあるといつてよい。プルーストがしばしば使う「*en être*」というフランス語は、「その仲間である、一味に属している」という表現として、ふつうは「同性愛者である」という意味になるのだが、シュネデルはそれに加えて「ユダヤ人である」というもう一つの意味を重ねる。このキーワードは、ブルジョワ道徳が表向きの社会的コードとして機能していた第三共和制のフランスにおいて、いわば共同体にひび割れを起こしかねない異次元のコードを指し示している。筆者としてはこの言葉にさらに「神経症者である」という第三の意味を付与したいところだが。

シュネデルはこうして、「就寝の悲劇」の中核をなすママンのキスの挿話、同性愛の心理、母親と息子の精神的緊張関係、親殺しといった群をなす主題を一つ一つ解析していく。その方法はなるほど精神分析的なものではあるが、フロイトやラカン理論の垂流に見られがちな難解な用語への依存がなく、あくまでも伝記的事実やテキストに立脚した説得的な推論となっている。もちろん、時として過剰な裏読みや、大胆な仮説、強引な展開が見られないわけではない。だが、それもシュネデルの一貫した論理の延長線上にあり、また彼がプルーストの言葉のニュアンスにきわめて敏感であることの証左と言えないこともない。

次のような一節は、シュネデルの典型的な分析例である。

「ママンは、書くことへの導き手でもなく、奨励者でもなかった。息子が女優ラ・ベルマの演じる『フェードル』を観に行くことに対し、母親がどれほどはげしく反対したかを見れば十分であろう。彼女が恐れるのはライバルになりそうな女、あの「金色の声の輝き」ではない。母が許せないのは、息子が「考えもおよばないようなイメージ」のように、何か自分とはちがうもの、自分は知らないが息子が発見したいと望むもの……「目に見えないその形がそびえている、まさにその場で暴かれる女神の完璧な姿」……を「隠れて」よそに探しに行くことなのだ。母親のように「急にはるかへお発ちになるとやら……〔ラシーヌの『フェードル』からの引用〕」と朗々と述べるラ・ベルマを超えて、マルセルが探しママンが推察するものは、別のオブジェ、別の無限なのである。この文学的対象は息子を惹きつけ、ついには「無数の私の夢が見た、想像を超え

た独特な対象をようやく目を見開いて眺めるといふ甘美な驚き」のなかに引きずり込むにいたる。ママンは息子の健康状態に対する心配と、このような上演がもたらすかもしれない体調不良を口実としながら、息子がそこに期待していたのが、「快樂とはまったく別のもの、いっそう現実的な世界に属する真実」であったことを見抜くのである。『ジャン・サントウイユ』において母親は医者にこう打ち明ける。「私は息子が天才的芸術家になることは望んでいません。あの子の実際の知性と父親のあらゆる人脈によって、いつか大使館または高級官僚職で、重要な、高給が保証された、尊敬される地位にたどり着くのを見る方がいいんです。それでもあの子のなかに、詩の趣味を目覚めさせようと思います。」

時として世の母親たちは、息子の楽しみ……それは彼女らの統制できるものであり、その様態と対象を示すことによって人を介して体験することさえできるのだ……というよりも、その欲望を消してしまおうとするものだ。息子は欲望のために母親からいつも逃れ去り、母親も彼ら自身もそれを統制できないからである。」

(本書は筆者の翻訳により2001年秋に刊行の予定。)